

Glocal Tenri



1

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.17 No.1 January 2016

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・ 巻頭言
憎しみはあげない
／深谷忠一 1
 - ・ 天理教教理史断章 (100)
北野文書 ②「おさしづ」の写し翻刻
／安井幹夫 2
 - ・ 『教祖伝』探究 (19)
一閑話「魂」について
／深谷忠一 3
 - ・ 「おふでさき」天理言語学試論～「こと」
的世界観への未来像～ (21)
第3章 和辻哲郎—日本語と哲学の
問題 ②
／井上昭夫 4
 - ・ 「元初まりの話」に登場する動物たち (9)
「うを」と「み」と「どちよ」について
／佐藤孝則 5
 - ・ 「おふでさき」の標石的用法 (5)
「歌の理」について
／深谷耕治 6
 - ・ ライシテと天理教のフランス布教 (5)
ライシテの歴史 ②
／藤原理人 7
 - ・ 新宗教のブラジル伝道 (33)
救済の多様性 天理教 ③
／山田政信 8
 - ・ 地域福祉を拓く—新たな寄付文化の創
造— (13)
ファンドレイジングの手法としての街頭
募金 ①
／渡辺一城 9
 - ・ 遺跡からのメッセージ (7)
イギリス滞任記 ③ 大英博物館の白い
彫像と火焔型土器
／桑原久男 10
 - ・ 現代宗教と女性 (7)
「カッコウの親鳥」の正体
／金子珠理 11
 - ・ 2015 年度公開教学講座要旨 (3)
天理教と現代社会の生死観：成人
／八木三郎 12
 - ・ 図書紹介 (93)
『神都物語—伊勢神宮の近現代史—』
／幡鎌一弘 13
 - ・ English Summary 14
 - ・ おやさと研究所ニュース 15
- 「日本宗教史像の再構築」第 13 回研究会で報告 (幡鎌一弘) / Anthropology of Japan in Japan (AJJ)2015 年秋の大会で発表 (澤井治郎) / 日本爬虫両棲類学会第 54 回大会で研究発表 (佐藤孝則) / 「出前教学講座」申し込み受付 / 「教学と現代」のご案内 / 平成 27 年度公開教学講座のご案内 / 『グローカル天理』合本のご案内

巻頭言

憎しみはあげない

おやさと研究所長 深谷忠一 Chuichi Fukaya

謹賀新年
教祖 130 年祭の新年、心新たに陽気ぐらしの道を歩みたく存じますので、よろしくお願いいたします。

* * * * *

多発するテロ事件、拡大する空爆、世界はどうなるのか、暗澹たる気持ちになった昨年でしたが、その中、世界の人々の共感を呼び、勇気と希望を与えたフェイスブックへの投稿がありました。それは、11 月 13 日のパリのバラタン劇場でのテロで、妻エレンさん (35) を亡くしたフランス人ジャーナリスト、アントワヌ・レリスさんのテロリストたちへのメッセージです。

「君たちを憎むことはない」

金曜日の夜、君たちは特別な人の命を奪った。私の最愛の人であり、息子の母親だ。だが私は君たちを恨まない。私は君たちが誰であるかを知らないし、知りたくもない。君たちは死した魂だ。君たちは、神の名において無差別な殺りくをした。もしその神が、自分に似せて私たちをつくったとすれば、私の妻の体に撃ち込まれた弾丸の一つひとつが、彼の心の傷になるだろう。

私は君たちに憎しみの贈り物をあげない。君たちはそれを望んだのだろうが、怒りで憎しみに応えるのは、君たちと同じ無知に屈することになる。君たちは私が恐れ、周囲に疑いの目を向けるのを望んでいるのだろう。安全のために自由を犠牲にすることを望んでいるのだろう。それなら、君たちの負けだ。私はこれまでと変わらない。

私は今朝、妻と再会した。幾日も幾夜も待ち続けてやっと会えた。彼女は金曜日の夜、出かけた時のままだった。私が 12 年以上前、激しい恋に落ちた日と同じように美しかった。もちろん私は悲しみ

にうちひしがれている。君たちの小さな勝利を認めよう。だが、それも長くは続かない。

妻はこれからも、いつも私のそばにいて、私たちは、君たちが決して近づることができない自由な魂の天国で一緒になる。私は息子と二人になった。だが私たちは世界の全ての軍隊よりも強い。

君たちにかまっている時間はもうない。昼寝から目覚めたメルビルのところに行かなければならない。まだ 1 歳と 5 カ月になったばかりの彼は、いつもと同じようにおやつを食べ、私たちはいつもと同じように遊ぶ。この子の生涯が幸せで自由であることが、君たちを辱めるだろう。君たちには彼の恨みですら、あげることはない。(毎日 Jp-Cybozu.net 2015/11/20 より)

このような「魂」に響く言葉も、西欧先進国のもは世界中に伝わるが、アフリカ・中東・西アジアなどでのテロや空爆・誤爆で家族を亡くした人たちの声は黙殺されるという現実がある。第 2 次大戦で日本軍の捕虜になった元英兵捕虜の恨みが解消するのは、昨年 10 月にロンドンで開かれた“日英和解の夕べ”まで 70 年も待たねばならなかったという現実もある。それらのことを考えれば、“目には目”の“報復の連鎖の輪”を断ち切るには、ほとんど不可能ではないかとさえ思えます。

しかるに、そういう言い訳で世界の事情を傍観しているのを、親神が喜ばれることはありません。一人のジャーナリストの良心・理性によってともされた希望の灯りは小さくとも、それを皆の心のぬくもりで大きな光に育てる。それが、今日の時々の我々のなすべきことでありましょう。先ず自らが“誰にも憎しみの心をあげない”ことから始めて……。